すぎなみ産

vol.6
2022
令和4年10月発行

杉並区区制施行90周年記念号

乗り出せ、新ビジネス
「新ビジネススタイル事業導入助成」

100年、ずっと愛用される
良薬を作り続けて

大正時代から続く
阿佐谷の和菓子店

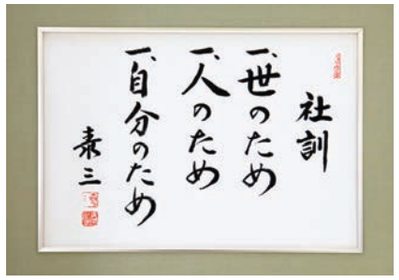
「多様性」で一歩先を進む
すぎなみの会社

SUGINAMI 90th ANNIVERSARY
杉並区区制施行90周年

杉並区制の発足当初から、ともに歩んできた老舗企業「救心製薬株式会社」

100年、同じ名前で人を救い続ける良薬

自分自身が服用したことがなくても、老若男女を問わず、多くの人たちが「救心」という薬のことを知っているだろう。
そして、「どうき、息切れ、気つけに」というキャッチフレーズも耳に馴染みがあるのではないか？
この薬は今から約100年前の1925年に登場し、現在も同じ商品名で愛用される超ロングセラーとなっている。
しかも、ストレスがもたらすどうきや息切れといった現代社会特有の症状にも効果が期待され、
その成分の中には免疫力を高めるとされる生薬も含まれている。
区制発足から6年後の1938年に製造所を設けて以来、杉並を拠点に「救心」を世に送り出し続けてきたのが救心製薬だ。
今回は区制の歩みとほぼ同じ歴史を有する老舗企業にスポットを当て、
この薬が誕生した経緯などについて詳しく紹介したい。



救心製薬の社訓は「世のため、人のため、自分のため」

初代社長である堀正由さんの肖像画。

展示室に並ぶ、貴重な生薬の見本。

鹿茸（ろくじょう）。
鹿の若い角。

人参（にんじん）。
オタネニンジンの根を乾燥したもの。

呉茱萸（ごしゅゆ）。
中国で栽培されている植物。

飲みやすさなども追求しながら、医薬品が開発されている。

歴史を物語る昔のパッケージなども保管されている。

本社屋上に分祀された筑波神社。筑波山はガマの油で有名。社員は、年の節目やイベントなどに合わせ参拝するという。

中野富士見町駅からほど近い本社センター棟。

■企業情報

■会社名：救心製薬株式会社
■所在地：〒166-8533　杉並区和田1-21-7
■代表取締役社長：堀厚
■創業：1913年
■事業内容：医薬品開発・製造販売
■TEL.03-5385-3211
■https://www.kyushin.co.jp/

貴重だった生薬の普及を大志に掲げ、「心臓を救う」とのメッセージを込めたネーミングで、時代を越えて支持され続ける

**富山に住んでいた一人の青年が大志を抱いて上京し、浅草に一軒の店を構えた。
やがてこの青年は、20世紀から21世紀へと時代が過ぎていっても、
変わることなく高く支持され続ける良薬を誕生させることになる。
今日に至るまでの救心製薬の歩みと「救心」誕生の秘話、
世代を越えて愛用されている理由などについて探ってみよう。**

創業者 堀正由（配置薬時代）

貴重で高い効能の生薬を普及させるため、富山から19歳の青年が丸薬を携えて上京

救心製薬の歴史は、創業者の堀正由さんが19歳で富山から上京し、1913（大正2）年2月に浅草区田島町（現在の台東区西浅草2丁目）で堀博愛薬房を創立したところからスタートする。堀家は江戸時代に富山藩で槍術の指南役として君主・前田家に仕えた家柄で、祖先から受け継がれた家伝薬も製造していた。堀正由さんは家伝の丸薬を携えて上京し、浅草に開業した自分の店で販売することにしたのだ。

その丸薬とは、いくつかの貴重な生薬を配合して作られたものだった。生薬とは、何らかの薬効があるとして、人類が古くから用いてきた動植物や鉱物だ。今の世では想像もつかないが、生薬の多くは稀少なもので、当時は「一握りの高貴な人々」でなければ手が届かなかったという。

堀正由さんはこうした貴重な動植物生薬を一粒の薬に配合し、広く一般の人々にも服用してもらいたいと考えたのだ。丸薬につけられた商品名は「ホリ六神丸」で、浅草界隈の家を一軒ずつ訪ね歩き、その効能について切々と訴えかけたという。やがてこの薬は評判を呼んで愛用者が増えていったが、堀正由さんはさらにあくなき挑戦を続けた。

当初、「ホリ六神丸」は万能薬として用いられていたが、「心臓の不調によく効く」との声が多数寄せられるようになった。そこで、配合などの改良を重ねて薬効を高めた新製品を開発したのだ。そして、薬効をダイレクトに連想できる商品名の検討を始めた。

写真左上：山梨工場には昔使用した道具が展示されている。
写真中：配合した生薬を丸薬の形状に仕上げる「製丸機」。
写真右：創業者が最初に売り歩いた「ホリ六神丸」。

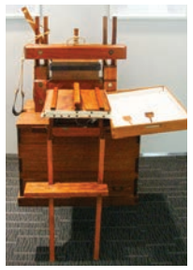
心臓を救うとのメッセージを込め、新製品の丸薬に「救心」と命名

「六神丸」から一字を採り入れた「神効丸」や、心臓に効くという意味を込めた「心効丸」などが候補に挙がったが、決め手に欠けると感じ、さらに検討を進めた結果、ついに浮上したのが「救心」だった。

心臓を救うという強いメッセージこそ、この薬の薬効に相応しいという結論に達し、新製品は1925（大正14）年に「救心」と命名され、その製造・販売がスタートした。これが今なお大勢の人たちに愛用されているロングセラー誕生の瞬間である。

なお、「日本ネーミング大賞2020」の医薬品系部門において、「救心」は優秀賞に選ばれている。一方、「ホリ六神丸」もその後に改良が繰り返され、現在は「虔脩（けんしゅう）ホリ六神丸R」の商品名で販売が続いている。

再び当時に時計の針を戻すと、1933（昭和8）年7月に堀正由さんは商号を救心製薬所に変更。そして、設備を拡張して生産を拡大するため、1938（昭和13）年3月に製造所を杉並区和田本町（現在の和田1丁目）に移転させた。そう、ここから「救心」と杉並区との歴史が重なっていくのだ。杉並区誕生は救心製薬所に改称する1年前の1932（昭和7）年で、そこから数えれば、今日までの道のりの長さもほぼ同じだ。



Interview

4代目社長で現在の
代表取締役会長
兼CEO（最高経営責任者）の
堀 正典さんが語る

「祖父（創業者）の面影」

**創業から今日に至るまで、救心製薬は創業家が
代々にわたってタスキをつないできた会社でもある。
そして、一貫して主力商品の筆頭となってきたのが「救心」だ。
それだけに、創業以来の精神がより色濃く反映されているようだ。**

私は2000（平成12）年～2019（令和元）年に社長を務め、その前任者である正巳は叔父に当たります。正巳の前は、私の父である泰助が社長を務めていました。そして、私は2019（令和元）年から代表取締役会長になり、代表取締役社長兼COO（最高執行責任者）に堀厚が就任しています。

江戸時代から富山は「配置売薬」で知られており、代々の堀家は薬売り（行商人）に持たせる薬も作っていたようです。配置売薬とは、行商人がお客様の家に薬を預けておき、1年に1度のタイミングで訪問して使った分の代金を受け取り、減った分を補充していくという方式の商いです。

創業者である祖父は私が大学生の頃に他界したのですが、いつも笑顔を浮かべていた印象が残っています。とにかく、私は“おじいちゃん子”でしたね。子どもながらに覚えているのは富山弁の語り口と、魚が大好物だったことですね。富山が海の幸に恵まれていることもあってか、本当に骨しか残らないほどきれいに食べ尽くしていたのを今でも覚えています。

母から聞いた話ですと、祖父はずば抜けた体力のある人だったようです。それに、行動力のある人で、漢方薬について学ぶために単身で中国の上海に渡ったとも聞いています。

創業当初はすべて手作業によって製造。

救心製薬の社章

こだわりも強い人で、「良薬なのだから、むやみに安売りはできない」という信念も貫いていましたね。

自社で製品を開発しているという強みとともに、抜きん出た商才という両輪で祖父は救心製薬を発展させていったのだと思います。

製品自体に揺るぎない自信を持っていて、この良薬をもってすれば必ず人を助けることができるという思いは、祖父の代からずっと堀家の人々に受け継がれています。救心製薬の社章は「人」をかたどったもので、祖父の教えで社訓となっている「世のため、人のため、自分のため」に由来しています。円の中の3つの部分は、誠実、信頼、奉仕を表すとともに、医薬品の3本柱である品質、有効性、安全性を意味しています。創業時より祖父が掲げた「救病済生（病から人を救い、生命を救う」という理想にも通じています。

左から社長の厚さん、専務の玲子さん、会長の正典さん。

■救心製薬の歩み

1913（大正2）年　堀博愛薬房 創立
1938（昭和13）年　製造設備拡張のため製造所を杉並区に移転
1950（昭和25）年　商号を「救心製薬株式会社」に変更
1965（昭和40）年　本社を杉並区和田1丁目に移転
1970（昭和45）年　事業拡張のため杉並区に第二工場並びに総合研究所を竣工
1981（昭和56）年　杉並区に新総合研究所を竣工
1998（平成10）年　杉並工場・生産管理センターを竣工
2013（平成25）年　創業100周年

新総合研究所（昭和56年9月）

杉並区和田に移転した新本社（昭和40年）

「心臓の薬」という先入観はもはや過去のもの 現代人を悩ます自律神経の乱れにも効用が!

発売当初からほとんど変わらぬ ロゴやパッケージのデザイン

日本国内で超ロングセラーとなっているだけにとどまらず、最近はアジアを中心とする国々にも輸出され、海外からも高い評価を獲得している「救心」。こうしてグローバルに販路が広がる一方で、発売を始めた頃からほとんど変わっていないのがパッケージのデザインだ。商品名の周囲を「雷文」と呼ばれる文様で囲み、左下には「鼎(3本脚の金属器)」が描かれている。「雷文」は中国で紀元前から用いられてきた装飾で、稲妻(天の意志)を図案化したものとか。そして、「鼎」は中国皇帝の帝位の象徴だったという。

長く愛用され、さらに海外にも支持層を広げている「救心」だが、救心製薬は「長い歴史を持つことだけが伝統薬の薬効の証ではなく、科学の裏付けが大切」と考えてきた。1960年代前半(昭和30年代後半)以降、国内をはじめイギリスやフランスにある研究所、大学、医療機関で基礎実験、臨床試験を重ねている。薬理試験、安全性試験のみならず、伝統薬としては珍しい薬物動態試験も実施してきたそうだ。医学博士の学位も持つ代表取締役社長兼COOの堀厚さんはこう語る。

代表取締役社長兼COOの堀厚さんは医学博士でもあり、救心製薬に入社するまでは研究畑を歩んできたという。

「長く研究畑を歩んできたので個人的にも興味深いテーマなのですが、生薬の効用を科学的に証明することは容易でないことも確か。もともと『救心』は漢方をベースにしたもので、かねてより研究や実験は進めてきていますが、まだまだ十分とは言えず、今後も取り組みに力を入れたいと考えています」

マイナーチェンジを重ねて今に至る「救心」のパッケージデザイン。

昔の人は今よりも短命だったが、 自発的な健康管理の意識が高かった

さて、こうして様々なアプローチも織り交ぜながら100年の歴史を刻んできた「救心」だが、この薬が誕生した頃と今では、人々の健康に対する意識にも違いがあるのだろうか?

「今と100年前とを比べて、まず大きく異なっているのが平均寿命ですね。1920年頃は男女とも40代前半という調査結果が出ています。当時は幼少のうちに亡くなってしまうケースが多く、実際の寿命にはかなりの格差があったと思われますが、それでも50代や60代は晩年といった印象が強かったことでしょう。ところが、今は80歳を過ぎても健在な人が珍しくありません。今と100年前では、健康面に関して共通しているところが少ないように思われます。現在もコロナ禍に見舞われているとはいえ、感染症で亡くなる人は昔のほうがはるかに多かったわけですから。一方で、現代には生活習慣病やガンを患う人の割合が増えており、その点も昔とは違います」

また、昔は具合が悪くなっても、今ほど気軽には医師に診てもらえなかったのが実情だと堀厚さんは指摘する。

「だから、自分の健康は自ら守らなければならないという思いが強かったと思います。今の言葉で言えば、セルフメディケーションという考え方です」

世界保健機関(WHO)の定義によれば、セルフメディケーションは「自分自身の健康に責任を持ち、軽度な身体の不調は自分で手当てすること」という。容易くは医師に診てもらえない昔の人は、いろいろな薬を試して自分に合ったものを選び出し、体調に応じて服用するという自発的な健康管理を行っていたのだ。

「少しでも不調だとすぐに医療機関を訪ね、処方された薬を何も気に留めずに飲むというのが現代人の典型例でしょう。健康管理を"自分ごと化"していないケースが多いのです」

自律神経の乱れに伴う症状改善や 免疫力を高めることでも注目が!

自発的な健康管理を心掛けるうえでは、市販薬の効用などに関する理解を深め、上手く使い分けていくことが大切。「救心」も昔は「心臓の薬」という印象が強かったが、最近は循環器系の症状に広く用いられているし、こうした持病を抱えていない人も視界に入れておいたほうがよさそうだ。

「どうきや息切れ、めまいは、循環器系の疾病がある場合だけに限らず、自律神経の乱れでも発症することがあります。仕事や人間関係などでストレスを感じ、自律神経が乱れてしまいがちなのが現代社会特有の現象でしょう。そういった場合にも『救心』を活用していただけたら幸いです」

さらに、コロナ禍で特に重んじられるようになった免疫力という観点からも、「救心」に配合されている生薬に注目が向けられているという。

「中国の研究では、強心、解毒作用があるとされる蟾酥(センソ)は、人体内でウィルスが増殖するのを抑制したという結果が出たそうです。蟾酥(センソ)は『救心』にも配合されている生薬で、もう少し詳しく説明すると、心筋の収縮力を高めて血液の循環を促し、余分な水分を排泄して心臓の働きを助けます。また、呼吸機能を高めて全身の酸素不足を改善します。その結果、免疫力が高まることが期待されます」

名称やパッケージは発売当初からのものを貫く一方、錠剤やカプセルのタイプも開発するなど、時代に応じた変化も見せてきた「救心」。今後も杉並に本社を構えながら、創業者が掲げた「救病済生」の理想を追求していくという。

経営陣の世代交代も進むが、当初より「救心」の本質は変わらず。

江戸時代の「ガマの油売り」でも知られる生薬

9種類の動植物生薬を調合して製造される「救心」。その中でも蟾酥(センソ)は、心筋の収縮力を高めて血液循環を促し、呼吸機能を高めて酸素不足を改善するという重要な効用がある。蟾酥はガマの油が原料。救心製薬の屋上には、ガマを祀った神社がある。

「救心」の主成分「蟾酥(センソ)」はガマの油から取れる。これにちなみ社内にはガマガエルの置物が多い。

コラム 広告宣伝のインパクトも強かった「救心」

「救心」の発売を開始した当初は呼び込みやクチコミを頼りに通信販売や店頭販売を行っていたが、その評判に手応えを感じた創業者の堀正由さんは、新聞・雑誌などのマスメディアを通じた大々的な広告宣伝を積極化したという。訴求力の高いコピーを添えた広告を打ち、1950年代半ば頃になると当時の「お笑い芸人3強」だった柳家金語楼、榎本健一(通称エノケン)、古川緑波(通称ロッパ)が集結した新聞広告で世間の関心を集めた。さらに、日本でもテレビが普及し始めるとコマーシャルにも力を入れ、知名度がどんどん高まっていった。

今でも「救心」のコマーシャルは世間でお馴染みの存在。情報誌「はあと」の発行やウェブサイトでのコンテンツ配信など、広告宣伝以外の方面でも、救心製薬は様々なスタイルで情報発信に力を入れている。

情報誌「はあと」。誌面に登場する著名人への依頼から、漢字パズルの作成まで、すべて広告部が行っている。

屋外看板(昭和27年頃)

SSS
キーワードでつながる
（杉並）の（スゴ）い（しごと）

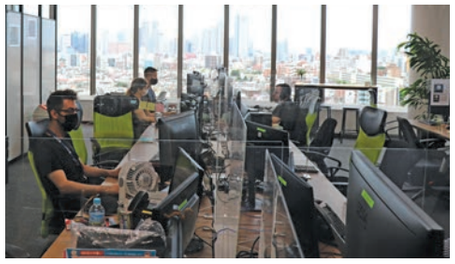
「様（よう）」 YOU

最近、盛んに用いられている「ダイバーシティ（多様性）」という言葉。漢字の「様」は「状態・ようす・ありさま」を意味します。「多様性」は「様々」という表現にも通じ、人種や性別、宗教、価値観、障害の有無など、いろいろな点で異なっている人々が地球上に共存することです。個々の違いを認め合い、尊重し合うことが今の時代に求められており、今回は「多様性」に関して先進的な杉並の会社を紹介します。

キーワーズ・インターナショナル（きーわーず・いんたーなしょなる）

多様性に富んだ人材が集結し、ゲームの裏方業務を全面的にサポート

キーワーズ・インターナショナルがオフィスを構えるのは、付近でも随一の高層ビル。窓から富士山と新宿の夜景を楽しめることから、海外出身のスタッフにも新オフィスが好評を博しているとか。



作業の特性上や機密上の問題などから、リモート勤務が不可能な部署もあり、社内の働き方も多様化している。

1998年設立のキーワーズスタジオは世界24の国・地域に展開し、ゲーム開発のサポートを手掛ける。2010年末にアジア初の拠点として設けたのがキーワーズ・インターナショナルで、現在は杉並のオフィスで40国籍の約400名が働く。

ゲームと言えば、パブリッシャー（発売元）を連想しがちだが、デベロッパー（開発会社）をはじめとする"裏方"の力抜きでは世に送り出すのは困難だ。キーワーズ・インターナショナルは、プロジェクトの企画段階からゲーム発売後のカスタマーサポートまで、幅広いサービスを提供している。

ゲームの開発やグラフィックの制作、機能デバッグ（不具合の検証）、現地言語への翻訳や音声制作（海外展開時のローカライズ）、言語デバッグ（翻訳などを実機上で確認）、カスタマーサポートといった7つのサービスを提供しています。

こう語るのは、営業部マネージャーの池田さん。規模拡大で手狭になり、2021年9月に現住所へ移転。「窓から富士山が見え、特に海外から来たスタッフに好評」（池田さん）という。

社歴約7年のバーンズ・ジェロムさんは語る。

「当初は英語が社内公用語でしたが、日本人の比率が増えて形勢逆転。でも、最近は様々な国の言葉が飛び交っています」

多様性は国籍や言語、性別だけにとどまらない。セールスマネージャーの中西一彦さんは打ち明ける。

「私は大学時代にゲーム会社を起業してヒット作を生み出し、アメリカ進出を図ったのですが、現地では評価されなくて撤退。ところが、今から約4年前に当時のキーワーズ・インターナショナル代表取締役（アメリカ人）が私が関わったゲームをプレイしてくれていて、ともに働こうと誘ってくれました」

多様な人々が集えば、自分だけでは得られなかった知見がおのずと得られる。それを体現しているのがこの会社だ。

■会社名：株式会社キーワーズ・インターナショナル
■所在地：〒168-0063 杉並区和泉1-22-19 朝日生命代田橋ビル7-9階
■代表：ハンサリ・ギオーム
■設立：2010年
■事業内容：アートアセット制作業務、ゲーム開発業務、音声収録・音響制作業務、機能デバッグ業務、言語デバッグ業務、翻訳業務、カスタマーサポート関連業務など
■TEL.03-4588-6760
■https://keywordstokyo.jp/

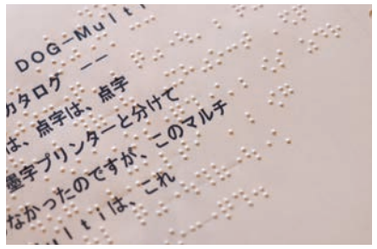
日本テレソフト（にっぽんてれそふと）

点字プリンターなどの独自開発製品で視覚障害者の「情報バリアフリー」を！

日本テレソフトの創業者で現社長の金子秀明さん。生粋のエンジニアで、これまでに数々の画期的製品を世に送り出してきた。

点字と墨字を同時印刷できる点字プリンターは視覚障害者と健常者の「情報バリアフリー」を実現。専用紙以外に普通紙に印刷可能な機種も。

簡単な操作で表示されている文章を読み上げる音声読書器「スマートリーダー」。点字ディスプレイとともに、視覚障害者に心強いツールだ。



「多様性」というキーワード、杉並への本社移転という2つのポイントは、日本テレソフトにも共通している。同社は視覚障害者の「情報バリアフリー」を追求し、点字プリンターや点字ディスプレイ、音声読書器などを開発・販売している。

点字とは、突起した６つの点を組み合わせて作られた文字で、視覚障害者はそれを指で触れて読み取ることができる。もっとも、晴眼者（視覚に障害がない人）の大半は点字を習得しておらず、何が書いてあるのかを理解できない。

「当社の点字プリンターは、点字と墨字を同時に印刷できます。また、英・仏・独語や中国語、韓国語、ベトナム語など、多言語に対応しています」（代表取締役の金子秀明さん）

一方、点字ディスプレイは中国の清華大学と共同開発したもので、スマートフォンなどの画面上に書かれている文字が点字に転換されて表示される装置だ。これを接続すれば、視覚障害者もスマホ画面の情報を読み取ることが可能となる。

そもそも、どういった経緯で視覚障害者のための製品を開発することになったのか？　金子さんはこう答える。

「30年程前、PCに向かって話すと内容を自動認識する製品の開発に挑みましたが、頓挫してしまいました。唯一、その際の考案技術で実用化できたのが視覚障害者向け機器です」

ようやくAI音声自動認識サービスが一般化してきたが、すでに金子さんは昭和の時代からその構想を練っていたのだ。杉並に本社を移転した理由については、次のように語る。

「官公庁との関わりが深く、以前は都心に本社を構えていました。しかし、最近は海外からの引き合いが増え、ネット上のやりとりが中心に。コロナ禍の多様な働き方にも対応し、私を含めて多くの従業員が暮らす杉並へ引っ越すことにしました。便利な場所でありながら静閑で満足しています」

第7回中小企業新技術賞・新製品賞など数々の受賞歴。

■会社名：株式会社日本テレソフト
■所在地：〒167-0034　杉並区桃井2-1-3 葉ビル3階
■代表：金子秀明
■設立：1986年
■事業内容：パソコンソフトの開発販売、インターネットの企画運営、福祉機器の開発販売、各種システム機器の開発販売、コンサルテーション（営業支援・ビジネス開発など）他
■TEL.03-6913-5641
■https://www.nippontelesoft.com/

こんなこと始めました

乗り出せ、新ビジネス

新しい商品、新しい販路…。新業態の開拓等を行うための区の助成制度
「**新ビジネススタイル事業導入助成**」を活用し、新たな事業への挑戦を始めている会社を紹介します。

3本のしっぽ

（有限会社さとハウス）

沖縄の焼き物の仕入・販売をスタートさせた
荻窪・教会通り商店街の不動産会社

代表の真田佳美さん（左）と、その娘であり店長の仁佳さん。

荻窪駅から徒歩3分。店舗のある荻窪教会通り商店街を「さらに活性化させたい」という想いもあり新事業をスタートした。

創業来、地元荻窪に根付く「さとハウス」。荻窪で営み続け、荻窪で生まれ育ったスタッフもいる。同店が2021年から始めたのが沖縄の焼き物“やちむん”の店「3本のしっぽ」だ。

きっかけは代表の真田佳美さんが偶然、やちむんの小皿を買ったこと。そこから関心が高まり、買い足すようになったそう。「ほっとするんです。どんな料理にも合いますし」。一方、不動産の仕事は新型コロナ禍で来客スペースを使う頻度が減っていた。そこで、やちむん販売を検討したが、当初は五里霧中。後押しは「広報すぎなみ」で目にした区の助成制度である「新ビジネススタイル事業導入助成」だった。また、仕入は不動産業で知り合った、沖縄と縁を持つ方に相談。那覇市の壺屋陶器事業協同組合を紹介されたことで糸口をつかんだ。現在は縁を広げ、名の知られた「北窯」の作品など、多くの工房から仕入れる。

その過程には店長の仁佳さんの存在が大きい。百貨店勤務を経て、さとハウスに入社した仁佳さん。やちむんの世界に詳しかったわけでなく、しかも東京の新参者。沖縄の陶工から受け入れられるとは限らなかった。そこで手紙を送り、何度も足を運び長く話すなど、誠意を見せた。「初めは勇気がいりました。最近は仲間に入れてもらえた気がしています」。

作品は手作りだからこそ、大きさも色も個体差がある。佳美さんは「ぜひ手にとって温かみを感じてほしい」と話した。

■会社名：有限会社さとハウス
■所在地：杉並区天沼3-28-8
■代表：真田佳美
■設立：2001年
■事業内容：不動産業、小売業
■TEL.03-5347-3855
■https://www.instagram.com/3bon_shippo/

パティシエジュンホンマ

（株式会社ジェイアンドエム）

逆さでも落ちないソフトクリームを新たな魅力に
ヨーロッパで修行したパティシエによる高円寺の洋菓子店

高円寺はもともと本間さんが高校時代に通っていた馴染みのある街。

平成28年度の杉並区商店コンクール「東商杉並支部会長賞」など受賞も多数。

JR高円寺駅に店舗を構える「パティシエジュンホンマ」。高架のプラットフォームからも見える「駅前店」と、徒歩5分の「高円寺アトリエ」の2店舗がある。アトリエと冠された店名には、代表でありパティシエの本間淳さんの作り手としての矜持がにじみ出ている。フランスやベルギー、そして日本と渡り歩いて、いくつもの店でシェフパティシエを務めた。その後、2011年に独立。近隣の店舗や住民との縁も大切にして、いろいろと教わりながら、営業を続けてきたと話す本間さん。「高円寺は人情がある街ですよね。僕の性に合っている気がしています」。

そんな同店が区の助成制度の「新ビジネススタイル事業導入助成」で乗り出す新事業がアイスクリーム事業だ。導入したのは、圧をかけることでやわらかくも形を保てるソフトクリームが作れる機械。ベルギーで働いていた経験から、チョコレートには特に力を入れる本間さん。この機械では「逆さにしても落ちないソフトクリーム」が作れるため、ソフトクリームをチョコレートにくぐらせることも可能だという。現在は本格的な商品提供に向けて、試行錯誤を繰り返している。

機械の導入は自身が考える「本物のおいしさ」を表現するための一つ。「作り“たて”、搾り“たて”、焼き“たて”……やっぱり“たて”って多い方がいいと思うんです」と話す本間さん。出来たてのおいしさを、高円寺から日々、届けている。

■会社名：株式会社ジェイアンドエム
■所在地：高円寺（駅前店）　高円寺南4-28-10
　　高円寺アトリエ　高円寺南4-8-1
■代表：本間淳
■設立：2011年
■事業内容：洋菓子の製造販売業
■TEL.03-5307-8004
■https://jun-honma.com/

もっと知りたい すぎなみのこと

大正時代から続く阿佐谷の和菓子店 地域で営み地域へ還す

株式会社とらや椿山

坂井潤さんは、2年間、群馬県で和菓子の修行をした後に、とらや椿山で仕事をするようになった。「どらやきの皮一枚焼くのも簡単じゃない。一人前になるのには10年かな」と話す。現在、とらや椿山では製菓学校を卒業した20代の店員が日々研鑽を積んでいる。

「ずっと良いことは続かないし、悪いことも続かない。ただ、地道に一生懸命やろうとはしてきたかな」

こう話すのは、とらや椿山の三代目、坂井潤さん。口ぶりのとおり、順風の時代も逆風の時代もあった。

1925年、潤さんの祖父にあたる初代が阿佐谷に開いた虎屋菓子舗がその始まり。開店当初から繁盛したというが、戦争の影響により1940年から砂糖はいち早く供給制に。菓子店には大きな痛手だった。さらに強制疎開命令で阿佐ケ谷駅周辺の一帯の建物が取り壊される。虎屋菓子舗も例外ではなかった。

しかし終戦の翌年、阿佐谷で店を再開。1955年には店名を現在の、とらや椿山とし、代替わりしながら店は続いた。潤さんが店を手伝い始めたのは1984年、24歳のことだ。

「父（二代目）の代の最後の頃はバブル景気。『なんで、こんなに売れるの？』と思うくらいでした」

時代は移り変わる。バブル崩壊に伴い景気は落ち込む。三代目となった潤さんを取り巻く環境は厳しかった。そこで新たな試みを行う。高級スーパーマーケットへの出店や、小学生対象の職場体験を教育委員会などと共に実施（2022年現在はコロナ禍で休止）など。直近ではフードデリバリーサービスも導入し始めた。

お客様の味覚に合わせて和菓子も変化させる。

「若い方はご年配の方より、甘さを控えたものを好みます。そこで20年ほど前から、お客様の反応を確かめながら味を調整しています。今は、私が手伝い始めた頃と比べ、砂糖の量を2割落としています」

また原材料は厳選し、小豆は大納言を使用。ただし昨今は、原材料高騰の影響が小さくない。

「2022年は、ほぼ全ての原材料が値上がり。ですが代用品は絶対に使いません。信用を損ねますから。食べ物を扱う以上、とにかくおいしさが第一」

とらや椿山が大事にする物事は他にも多々ある。地域とのつながりは、その核と言えるかもしれない。

「『地域で商売をさせてもらうのだから地域に還元』という、初代からの言い伝えのようなものがある」

中杉通りにあるケヤキの植樹は、初代から区への提案だったそう。阿佐谷七夕まつり開催にも、初代は尽力した。三代目の潤さんも、地元の各種団体へ積極的に参加。地域との縁は深く、寺院などへも定期的に商品を納める。

とらや椿山は間もなく100周年を迎える。

「お客様に支えられたからこそ、やってこられました。その感謝を、心中で感じているだけでなく、伝えていかなければならないと思っています」

店内ショーケースには名物の一つ「大栗まんじゅう」などが並ぶ。奥の喫茶室では、某テレビ番組でも話題を呼んだ「小倉ホットケーキ」が食べられる。

■会社名：株式会社とらや椿山
■所在地：〒166-0004
　杉並区阿佐谷南1-33-5
■代表取締役社長：坂井潤
■設立：1925（大正14）年
■事業内容：菓子製造販売
■TEL.03-3314-1331
■http://www.toraya-chinzan.com/

二代目が作った、昭和10年代の阿佐ヶ谷南大通り商店街の絵地図。「とらや和菓子店」の字が右側に読める。（★印）

区制90周年 データで見る杉並の産業

杉並の産業は、日本の産業構造と歩調を合わせるように変化してきた。

区の発足より、さかのぼること7年。畑が広がる村に1925年、航空機メーカーの中島飛行機の工場が作られた。これにより協力工場が増えるなど、製造業が発展。同時期には遊具メーカーの日都産業（本誌vol.3特集）、丸美屋食料品研究所（現在の丸美屋の前身）などが事業を始めたり、医薬品メーカーの救心製薬（本号特集）が製造設備拡張のため区に移転したりしている。

その後、太平洋戦争が終わると企業は軍需産業から民需産業へと転換。富士産業（旧中島飛行機）は富士精密工業（後にプリンス自動車工業）に。生活に身近な産業も増え、卓球用品メーカーのタマス（本誌創刊号特集）が運動具店を杉並に設立したのも戦後間もなくだ。

時代が進み、高度成長期に入ると農地が宅地化されていく。すると、においや音が出る工場は郊外へと移転した。産業は幅が広がり、高度成長期以後には、ドラムメーカーのカノウプス（本誌vol.2特集）やファッションしらいし（本誌vol.4特集）、アニメーション製作を行うサンライズスタジオなどが創業。商店街も発展し、飲食業やサービス業も増えた。

バブル経済を過ぎるとICT産業の発展に伴い、区内にもICTベンチャー企業が生まれる。一方で製造業も生まれ続け、洗浄機器などのメーカーのガリュー（本誌vol.6特集）も2000年以降の創業だ。

現在、かつての中島飛行機の工場跡地には桃井原っぱ公園があり、区民の憩いの場となっている。暮らしも身近で都心に近い杉並。その利便性を生かし、今後も多くの産業の誕生と発展が期待される。

和暦（西暦）	区の出来事	社会の出来事
昭和7年（1932）	杉並区発足	
昭和8年（1933）	井の頭線開通	
昭和12年（1937）		日中戦争（～1945年）
昭和14年（1939）	区庁舎落成	
昭和16年（1941）		太平洋戦争（～1945年）
昭和18年（1943）		東京府と東京市が合併し東京都になる
昭和21年（1946）	GHQにより富士産業（旧中島飛行機）解体	日本国憲法公布
昭和22年（1947）	富士精密工業（1961年にプリンス自動車工業に商号変更）設立 繊維工場協会設立（1955年に杉並産業協会に改名）	
昭和25年（1950）	区に商工相談所新設	
昭和27年（1952）	協同組合杉並工場協会設立	
昭和29年（1954）	第1回阿佐谷七夕まつり開催	
昭和32年（1957）	杉並公会堂開館 第1回高円寺阿波おどり開催	
昭和37年（1962）	地下鉄丸ノ内線開通	
昭和38年（1963）	都電杉並線廃止 環状七号線開通	
昭和39年（1964）		1964年東京オリンピック開催
昭和41年（1966）	プリンス自動車工業、日産自動車と合併 都が高井戸に杉並清掃工場建設を発表（通称：東京ごみ戦争。～1974年）	
昭和42年（1967）	杉並会館開館	
昭和47年（1972）		沖縄返還
昭和48年（1973）		オイルショック
昭和49年（1974）	東京商工会議所杉並支部設立	
昭和54年（1979）	済美養護学校開校 荻窪駅北口再開発の工事開始	
昭和56年（1981）	大田黒公園開園	
昭和58年（1983）	杉並清掃工場が本稼働	
昭和61年（1986）	蚕糸の森公園開園	
昭和63年（1988）	平和都市宣言 荻窪産業協会と協同組合杉並工場協会が合併し、杉並産業協会になる	
平成元年（1989）	セシオン杉並開館	ベルリンの壁崩壊
平成3年（1991）	荻窪体育館開館	消費税導入（3％） 平成に改元
平成7年（1995）		ソ連崩壊
平成8年（1996）	井草森公園開園	
平成9年（1997）	ゆう杉並開館	地下鉄サリン事件
平成10年（1998）	日産自動車荻窪工場が群馬県へ移転	阪神淡路大震災
平成12年（2000）	南北バスすぎ丸運行開始	
平成13年（2001）		アメリカ同時多発テロ
平成15年（2003）	アニメ資料館開館（杉並開館内）	
平成16年（2004）	南北バスすぎ丸「さくら路線」開通	
平成18年（2006）	アニメキャラクター「なみすけ」選定	
平成20年（2008）	南北バスすぎ丸「かえで路線」開通	
平成21年（2009）	杉並芸術館「座・高円寺」開館	
平成23年（2011）	桃井原っぱ公園開園	東日本大震災
平成24年（2012）	杉並区制80周年まつり開催（現「すぎなみフェスタ」）	
平成31年		令和に改元
令和元年（2019）		新型コロナウイルス感染症の世界的大流行
令和2年（2020）		2020年東京オリンピック開催
令和3年（2021）	杉並区制90周年	
令和4年（2022）		

杉並区誕生お祝いパレード

区庁舎（昭和14年）

阿佐ヶ谷駅強制疎開（昭和20年）

中杉通り（補助133号）開通（昭和56年）

旧蚕糸の森研究所（昭和50年）

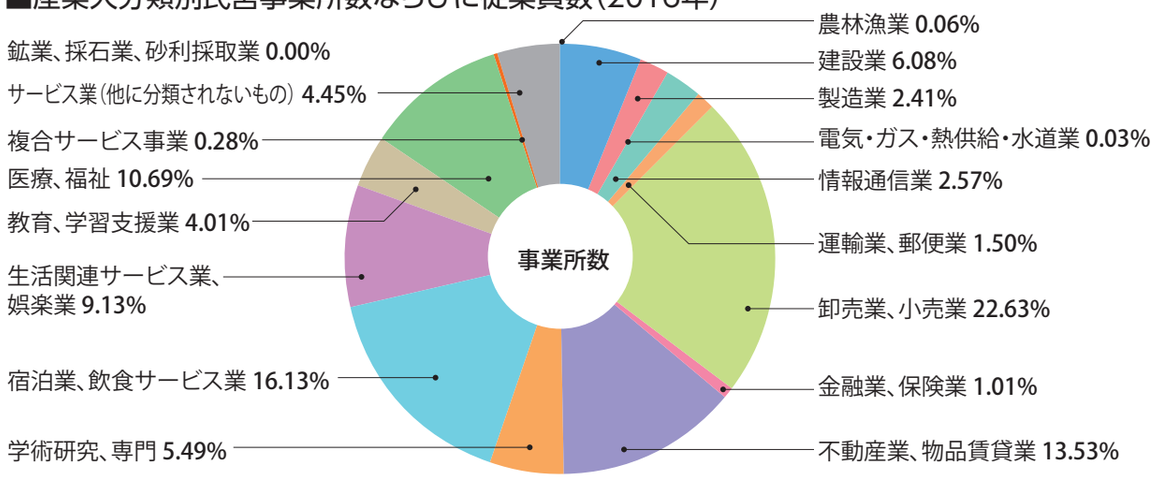
区新庁舎落成（平成5年）

すぎ丸（天王橋）

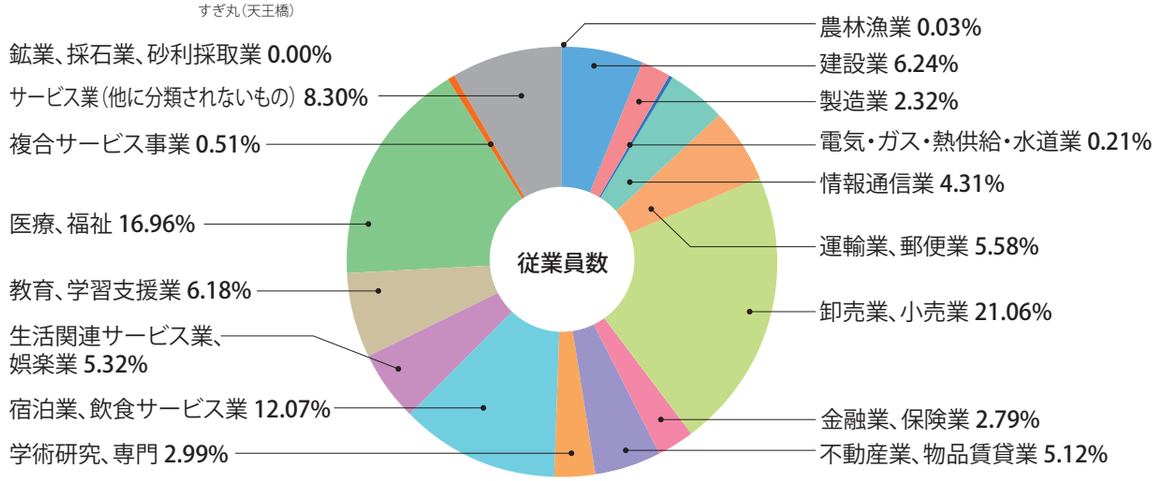
2017年すぎなみ産業フェア開催風景

『すぎなみ産』創刊号（平成29年）

■産業大分類別民営事業所数ならびに従業員数（2016年）



※「平成28年経済センサス-活動調査結果」より。データには不詳を含む。



※「平成28年経済センサス-活動調査結果」より。データには不詳を含む。

杉並の産業の移り変わり

杉並産業協会から見て

杉並の仕事に関わる多くの人たち。
杉並産業協会も会社活動を支える団体の一つとして、
杉並の仕事に寄り添ってきた。
杉並産業協会から見た、産業と街の移り変わりを紹介する。

杉並産業協会会長
佐藤 慎祐さん
佐藤会長は、
すぎなみフェスタの
実行委員長も務める。

75年以上にわたり杉並の仕事を支える

区内を中心に、労働保険事務を請け負うなどの活動を行う杉並産業協会。もともと区には荻窪工場協会（1947年設立。その後、荻窪産業協会と改称）と協同組合杉並工場協会（1952年設立）の2つの団体があり、これらが1986年に合併した。佐藤慎祐会長（6代目）は以下のように説明する。

「杉並には税務署が2つあるため、工場協会が2つありました。名前のとおり、はじめは製造業の集まりです。今は業種、法人・個人の区別はありません」

2022年3月末では149社が会員となっている。

時代と共に移り変わった数々の工場と広い農地

「昔は製造業が多かったですよね。戦前から中島飛行機の工場もありましたし、歴史の長い会社では岩崎通信機も。また、隣接する渋谷区幡ヶ谷にはオリンパスの事業所もありました。こうした関係から区には製造業として工場が多かったのです」

佐藤会長自身も昔の杉並を知る区民の一人だ。

「私は杉並で生まれ、現在も杉並に住んでいます。小学校までの一時は世田谷に住んでいましたが、その頃も、祖父母が杉並で工場を持っていましたから、よく遊びに来ていました。五日市街道にも小さな工場がいっぱいありましたが、農家さんも多かった。井の頭通りから神明通りの辺りまで大きな農地が広がっていましたね」

これら農地は宅地化が進んで、農家も減り、工場もまた郊外へと移転していった。

「また、個人的に街並みが変わった点では、1981年のタウンセブンビルの完成が印象的です。それまでの荻窪新興商店街が新しくなりました。今、杉並産業協会があるDaiwa荻窪タワーの近くには、まだ当時の名残のように商店が集まる区画があります」

杉並の産業発展に向けた想い

「杉並は緑が豊かですし住みやすい街。ですから、飲食、生活、教育関連など、日常生活を支えていけるサービス業が創業しやすいように思います。また、多くの企業がありますから、学生たちや、これから働こうとする方々には、ぜひ杉並の魅力ある企業を知っていただきたいですね」

杉並産業協会には若い会社や、代替わりした若い経営者も会員になっている。杉並で生まれる縁が今後の産業発展に役立つことは間違いないだろう。

西荻窪南口商店街（昭和初期）

環状八号線と高井戸駅（昭和41年）

2020年すぎなみフェスタ開催風景

すぎなみ
オススメ食堂
本誌P.7で紹介した
「株式会社キーワーズ・
インターナショナル」の
スタッフのオススメ！

住宅街の四つ角に青と白のファサード
人気のパンを焼くのはオートバイ雑誌の元編集者

飾られたバイクグッズの隣には、ご近所の方のハンドメイド品や小学生の絵が。そんな店内と同様に「Seeds man Baker」のパンにはハードさと優しさがミックスされています。バターや砂糖は控えめに自家製サワー種や全粒粉を使ってしっかりと焼き上げたパンは、噛むごとに小麦の香ばしさが口に広がります。

■所在地：〒168-0062 杉並区方南1-50-4 平岡ビル1F
■TEL.03-5329-0755
■営業時間：9：00～19：00　■定休日：月曜日、火曜日
■【Facebook】https://www.facebook.com/SeedsmanBaker/

杉並区産業振興センター

〒167-0043　杉並区上荻1-2-1　Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077（就労・経営支援係）

杉並区内産業のさらなる発展を図るため、区内産業団体（東京商工会議所杉並支部、杉並区商店街連合会、杉並産業協会）と同じフロアに設置した区の産業振興部門です。それぞれの団体と連携しながら、商店街や中小企業の支援、観光・アニメ事業の推進、都市農業の振興など、区内産業の活性化に向けた取り組みを行っています。

■主な取扱業務
- 中小企業資金の融資あっせん、商工相談
- 就労支援、創業支援
- 商店街の各種支援事業
- 観光事業の推進、アニメの振興
- 特定商業施設に関する届出
- 都市農業の振興、区民農園の管理
- 中小企業勤労者福祉事業

杉並産業協会

〒167-0043　杉並区上荻1-2-1　Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-3220-1231

杉並区内の法人および個人を中心とした事業主で組織運営されている唯一の産業団体です。労働保険事務組合として労働保険の取り扱いも行っています。会員企業には労働保険事務組合への加入の他にも従業員福利厚生のための健康診断、レクリエーションの企画や事業主の皆様には優良工場見学、講演会、賀詞交歓会等の開催などを行っています。

■主な取扱業務
- 関係官庁に対する届出書類の記入代行・指導
- 労働保険事務組合の運営
- 講演会・交流会の開催
- 団体への表彰者の推薦
- 会員企業に勤める従業員の方への福利厚生事業
- 会報の発行
- 会員間の親睦事業

すぎなみ産 vol.6　令和4年10月発行
編集・発行：杉並区産業振興センター
〒167-0043　杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077
登録印刷番号
04－0067

制作：杉並産業協会
クリエイティブ・ディレクター／アート・ディレクター：岸部浩三
ライター：大西洋平
ライター・エディター：三坂輝
カメラマン：豊田佳弘（表紙・p1～6）
イラストレーター：柿崎えま

すぎなみ産 発刊にあたって

杉並の仕事は面白い！

約20,000の事業所と、その仕事。

「すぎなみ産」は、杉並区に産まれた仕事を集めました。

自然と生活が混じり合う、暮らしやすいこの街に、

多種多彩な産業は結びついています。

面白がってて、面白い。

好きなことを楽しんでやって産まれた身近な物事。

杉並発の産業は、こんな顔立ちでした。

杉並の仕事は面白い！